

[公演ノート]

《MISSA MISERICORDIA》の作曲と初演

The Composition and Premiere of 《MISSA MISERICORDIA》

小口浩司

Koji Oguchi

〈抄 録〉

2016年10月29日（土）、教皇フランシスコが提唱した「いつくしみの特別聖年」にあわせて作曲したミサ曲を、筆者は自身の指揮によって初演した。曲名は《MISSA MISERICORDIA（ミサ・ミゼリコルディア）》である。

本稿はこの新曲の概要と、聖歌隊と共に初演したコンサートを報告するものである。

キーワード：いつくしみの特別聖年、初演、作曲、ミサ曲、聖歌隊

Abstract

I premiered and conducted a Mass on October 29th 2016, entitled “MISSA MISERICORDIA”. It is composed by me, for the “Jubilee Year of Mercy” advocated by Pope Francis in the Catholic world.

This article explains the new work and reports on the premiere concert with a choir.

Keywords : Jubilee Year of Mercy, premiere, composition, a Mass, choir

1. はじめに

指揮者で聖歌隊音楽監督の筆者は、新しい教会音楽の発信を目的として、定期的に作曲と初演活動が続いている。

今回の作曲は、新しいラテン語によるミサ曲で、曲名は《MISSA MISERICORDIA（ミサ・ミゼリコルディア）》である。教皇フランシスコ（1936～）¹⁾は、2015年12月8日から2016年11月20日まで、全世界のカトリック教会で「いつくしみの特別聖年」²⁾を行うことを提唱した。本作は、この特別聖年のために書き下ろした。初演は2016年10月29日（土）、筆者の指揮と立教新座中学校・高等学校クワイヤーの合唱により、立教学院聖パウロ礼拝堂にて行った。

本稿はこの新曲の概要と、聖歌隊と共に初演したコンサートを報告するものである。

2. 新作《MISSA MISERICORDIA (ミサ・ミゼリコルディア)》の概要

2.1 作曲の契機と目的

かつての教皇ヨハネ・パウロ2世(1920～2005)³⁾は、1981年に日本を訪問した際、広島で「戦争は人間の仕業です。」と述べた。それ以降、人類はその仕業をどれだけ反省したと言えるだろうか。むしろ、同じ過ちを繰り返してはいないだろうか。筆者は、日頃からこのようなことを考え、人類の平和のために、一人の音楽家として何ができるかを考えてきた。

2016年7月、カトリック教会が「いつくしみの特別聖年」を過ごしていたまさにその時、筆者にとって衝撃的な事件が起きた。ミサを執り行っていたフランス人の神父が、テロリストによって射殺されたのだ。あの時に抱いた激しい憤りは、今も忘れることができない。神に対して不信感を抱いたほどだ。

しかし、『新約聖書/マタイによる福音書』5章44節には、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」と、イエスが語った「山上の説教」⁴⁾の言葉が残されている。その教えに沿い、忠実に何ができるかを模索した結果、筆者は一つの結論にたどり着いた。それが、カトリック信者にとって最大の祈りである「ミサ」のための音楽を作曲することだった。罪のない人々が命を落とす事件が多発するこの世界において、大事な人を失った人々の悲しみや苦しみに寄り添い、共に祈る音楽の必要性を強く感じたのだ。

本作の《MISSA MISERICORDIA》は、日本語に直すと「いつくしみのミサ」となり、「いつくしみ」とは、愛よりも深い「慈愛」という意味だ。人間は皆弱く、とかく自分本位の考えや行動をしてしまう。「深い思いやりの心を持ち、どれだけ他者に向けて癒やしを与えることが出来るか」という深いテーマに基づく今回の作曲は、筆者にとっても挑戦であった。

2.2 楽曲の詳細

2.2.1 構成

全世界の共同一致を目指して、テキストはラテン語を採用した。第2バチカン公会議⁵⁾以降、各国の言語を用いてミサを執り行うカトリック教会ではあるものの、共通言語としてのラテン語の重要性は、今日でも普遍的なものだと筆者は捉えている。

曲は、《Kyrie》《Sanctus-Benedictus》《Agnus dei》で、ミサ通常文⁶⁾に含まれる《Gloria》は作曲していない。教会暦の待降節⁷⁾や四旬節⁸⁾といった備えと節制の時期に、《Gloria》が歌われないのと同じ配慮である。

2.2.2 作曲の工夫と解説

祈りの音楽を書くために筆者がまず行ったことは、自分自身が祈りに集中できる空間に身を置くことだった。筆者にとって日本での信仰の故郷は、長崎県の五島列島⁹⁾であり、毎年夏に長期滞在をする。本作も、この地で得たインスピレーションによって完成した。

作品の特筆すべき点は、あわれみ、嘆き、嘆願、怒りといった人間の叫びの中に、神の導く光を確信できるように工夫したことである。以下、ミサ曲の2曲目である《Sanctus-Benedictus》の譜例を用いて、更に詳しく解説する。

①「あわれみ」の表現……(楽譜1) 1-3小節のテナーの音進行

三位一体¹⁰⁾の神を礼拝するため、冒頭の“Sanctus”は3回繰り返す。天の神に向かって歌うため、

楽譜1

(2) Sanctus-Benedictus

Koji OGUCHI

Tenor

Bass

Sanc - tus, sanc - tus, sanc - tus, Do - mi - nus

1.

T

B

De - us sa - ba - oth. Ple - ni sunt coe - li et

2.

T

B

ter - ra glo - ri - a, glo - ri - a tu - a. oth. Ho -

T

B

- san - na in ex - cel - sis, in ex - cel - sis.

主旋律の音形は上行形で作曲されることも多いが、今回は完全なる下行形をとる。神の「あわれみ」が天から全地に降りてきて、私たちの世界がその愛で満たされることを願う、筆者のこだわりである。

②「嘆き」の表現……（楽譜1）1小節目冒頭の和音、2-3小節と6-7小節のベースの音進行

1小節目の冒頭の和音はA majorであるが、極めて安定しない「嘆き」の音配置をとっている。地上を現す主音が内声に1音、天の国を現す第5音が外声に2音、安定を現す第3音のC#は含まれていない。天の国にのみ平和があり、この地は動乱に満ちている暗示である。

2-3、6-7小節のベースは半音階を伴う上行形で、暗く憂鬱な世界からはい上がろうとする人間の心の動きを象徴する。「嘆き」と同時に、人類の持つ生命力と希望の表出でもある。

楽譜2

15
T Be - ne - dic - tus, Be - ne - dic - tus qui ve - nit in no - mi - ne
B Be - ne - dic - tus, Be - ne - dic - tus qui ve - nit in

19
T Do - mi - ni, Be - ne - dic - tus, Be - ne - dic - tus qui
B no - mi - ne Do - mi - ni, Be - ne - dic - tus, Be - ne - dic - tus

22
T ve - nit in no - mi - ne Do - mi - ni. Ho -
B qui ve - nit in no - mi - ne Do - mi - ni.

③ 「怒り」の表現……（楽譜1）11-12小節

“Hosanna in excelsis（いと高きところにホザンナ）”と、高らかに神を讃えるテキストであるにも関わらず、「怒り」の表現を全面に押し出す工夫をした。「なぜこの世はいつも争いに満ちているのか、全能の神ならばなぜこの世を救ってくれないのか。」という、筆者の苛立ちが込められている。

④ 「嘆願」の表現……（楽譜2）15-17小節と19-21小節

“Benedictus（ほむべきかな）”は、“qui venit in nomine Domini（主の名によって来られる方）”にかかっている。『旧約聖書』の時代から聖書の中に何度も登場する、救い主の再臨を待ち望む言葉だ。この主を呼び求める「嘆願」の念を強めるのが、テナーとベースの旋律の掛け合いである。

3. 初演コンサートの概要

3.1 初演データ

3.1.1 演奏者

指揮は筆者の小口浩司、合唱は男声聖歌隊の立教新座中学校・高等学校クワイヤーである。

初演に中・高生のグループを起用した理由は次のとおりである。「いつくしみ」を音楽で伝えるためには、若く瑞々しいサウンドを持つこのグループの存在が筆者にはどうしても必要であった。『新約聖書/マタイによる福音書』の第8章1～4節にも、「心をいれかえて幼な子のようにならなければ、

立教新座中学校・高等学校クワイヤー

S.P.F. Chapel Concert

2016

祈り 賛美

～罪のない人々の苦しみのために～

10.29 sat.	指揮 小口浩司	10.30 sun.
開演 13:30	伴奏 福田達也	開演 14:10
開場 13:15	村上隆太	開場 13:55

◇初演
MISSA“MISERICORDIA” (K. OGUCHI) Cantate Domino (G. O. Pitoni)
The Lord's my shepherd (B. Chilcott) 球根の中には(N. Sleeth)
Lord, I lift my hands to you (L. V. Beethoven) For the beauty of the Earth(J. Rutter)
e.t.c. e.t.c.

場所 立教学院聖パウロ礼拝堂(新座チャペル)
〒352-8523 埼玉県新座市北野 1-2-25

お問い合わせ クワイヤーホームページ QRコード 

電話：048-471-2323 (代表) 顧問 中村勝

(図1) コンサートフライヤー

天の国にはいることはできないであろう。この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。」と書かれている。

3.1.2 演奏日時と場所

本作は、2016年10月29日(土)13時30分より、「S.P.F. (St. Paul's Festival) チャペルコンサート2016」において初演した。場所は立教学院聖パウロ礼拝堂で、立教学院の新座キャンパス内にあるチャペルである(収容人数350名)。

秋の文化祭内で2日間に渡って行うこのコンサートは、学校関係者だけではなく、広く社会に公開されている。今年はキリスト教ネットメディア「クリスチャントゥデイ」の記事(2016.10.21)で紹介された。

筆者はこのグループの常任指揮者を務めている。そのため、演奏会のテーマや選曲に至るまで、そ

の一切をプロデュースした。目的はチャペルや聖歌隊という、日本には馴染みの薄い文化の紹介と普及である。また、音楽で社会に勇気を与えるメッセージを発信することも、聖歌隊としての重要な役割だろう。

3.2 プログラム

3.2.1 コンサートのテーマ

2章1節に前述したように、シンプルに「祈り」とした。

『新約聖書/ヨハネによる福音書』14章27節には、「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。」と、キリストが最後の晩餐¹¹⁾の席で約束した内容が記述されている。しかし、平和をもたらすキリストが生まれて既に2016年、私たちの世界は本当に平和になったと言えるであろうか。もはや世の中は混とんとしている。だからこそ、このどうにも言い表せない思いを音楽で吐露するコンサートを行おうと、筆者は決めた。「祈り」とは、キリスト教で「神との対話」という定義を持つ。

3.2.2 曲目

今回のコンサートでは、初演のミサ曲だけでなく様々な曲目を取り入れることにした。それぞれの曲が持つ精神性を結集することが、テーマの「祈り」を増幅するものになると考えたのである。

プログラムは全体を2部構成とし、前半は、ミサ曲を含む筆者が作曲したラテン語の作品を集め、後半は、ピアノ伴奏付きのアンセム¹²⁾と呼ばれる作品の数々を取り上げた。以下に全演奏曲目を列記する。

◇S.P.F. Chapel Concert 2016「祈り」 2016年10月29日（土）◇

1. 《この世のなみかぜさわぎ》アイルランド民謡／小口浩司編曲

2. 《Amen-Alleluia》小口浩司作曲

カノン（輪唱）型式の礼拝用小品。派遣の祝福に応答するアーメン唱として作曲し、アレルヤ唱とコーダがキリスト復活の喜びを歌う。

3. 《Ave Maria 2013》小口浩司作曲

広島の世界平和記念聖堂にある「平和の元后（Regina Pacis）」に捧げる作品。

「平和の元后」という称号が制定されてから100年を迎えた2015年、歌詞と曲の一部を改訂。

通常のラテン語のテキストである“Sancta Maria, Mater Dei（神の母 聖マリア）”部分を、“Sancta Maria, Regina Pacis（平和の元后 聖マリア）”とすることで、恒久の平和を祈り求める精神を強めた。

4. 《MISSA MISERICORDIA》小口浩司作曲

I. Kyrie II. Sanctus-Benedictus III. Agnus dei

5. 《The Lord's my Shepherd》B. Chilcott作曲

6. 《All things bright and Beautiful》J. Rutter作曲

7. 《Lord, I lift my hands to you in Prayer》L. v. Beethoven作曲

8. 《Look at the world》J. Rutter作曲

アンコール

9. 《君は愛されるため生まれた》イ・ミンソプ作曲/小口浩司編曲
10. 《ふるさと》小山薫堂作詞/youth case作曲

4. まとめ

4.1 入場者数とアンケート

初演日の2016年10月29日(土)は、チャペルのキャパシティを超え、立ち見が出るほどの盛会となった。参考までに書き出すと、翌日の10月30日(日)も同様であった。コンサート2日間で、延べ700名近くの来場者を記録したことになる。

その中からアンケートに答えていただいた方々の意見を、一部取り上げる。

- ・新曲初演という貴重な時間に立ち会えたことを心から嬉しく思います。心温まる素敵なミサ曲でした。(女性)
- ・クリスチャンではないが、ミサ曲は美しく温かいメロディーが体中に染みわたりました。(男性)
- ・友人を亡くして落ち込んでいた時に、感動的なミサ曲を聴き、生きる意味を考え直させられました。(女性)
- ・男声の音が、こんなにも温かく包み込んでくるものなのかと思いました。(女性)
- ・ずっとずっと聴いていたかったです。(男性)

4.2 考察

筆者は、『芸術研究7—玉川大学芸術学部研究紀要—2015』p. 87に以下のように記した。

筆者は、聖歌がカトリックの典礼音楽のみならず、全ての人々の癒やしにもなると推察した。



(図2) 満席のコンサート会場となった立教学院チャペル

今回、長崎と東京で行った公演は、いずれも満員御礼となったが、この現象も、社会が聖歌を求めている現れである。聖歌は、現代人のニーズにあった歌といえるのではないだろうか。

前節に提示した今年のコルソートの入場者数、並びにアンケートの内容は、引用文での筆者の推察を確信へと変えるに十分なデータであった。日本人のクリスチャンの割合は、全人口の1パーセントにすぎない。この数字だけを見ると、聖歌は日本人とはかけ離れた音楽であると思いがちである。しかし、聖歌を求める動きは確かにあるのだ。故に筆者は、聖歌は現代人のニーズにあった歌である、と考察する。

謝辞

演奏会の告知を記事にしてくださったキリスト教ネットメディア「クリスチャントゥデイ」の行本尚史様、演奏会へご来場頂き写真やアンケートをご提供頂きました皆様、そして、初演をしてくれた立教新座中学校・高等学校クワイヤーの皆様に、心より感謝申し上げます。

注

- 1) 教皇フランシスコ：アルゼンチン出身。カトリック教会の第266代ローマ教皇。
- 2) いつくしみの特別聖年：『新約聖書/マルコによる福音書』12章31節にある「隣人を自分のように愛しなさい」という、イエスが定めた掟に立ち戻るための計らい。特別聖年とは、25年ごとに設定される聖年以外に定められる特別な年のこと。前回は2000年の大聖年があった。信者には特別な赦しが与えられる。
- 3) ヨハネ・パウロ2世：ポーランド出身。カトリック教会の第264代ローマ教皇。
- 4) 山上の説教：『新約聖書/マタイによる福音書』5-7章にある、イエス・キリストが山上で12人の弟子達と群衆に向けて語った教えの総称。
- 5) 第2バチカン公会議：1962年から1965年にかけて開かれたカトリック教会の公会議。
- 6) ミサ通常文：教会暦（曜日や祝日）に応じて変化しない、ミサでの祈祷文のこと。
- 7) 待降節：クリスマスの4週間前の期間。アドヴェントとも呼ばれる。
- 8) 四旬節：復活の主日（イースター）前の日曜日を除く40日間。灰の水曜日から始まり、主の晩餐の夕べのミサ（聖木曜日）まで続く。レントとも呼ばれる。
- 9) 五島列島：九州の西、約100kmに位置する大小140あまりの島の総称で、ほぼ全域が西海国立公園。主な島は、福江島、久賀島、奈留島、若松島、中通島。
- 10) 三位一体：天の父、子なるイエス・キリスト、聖霊、の3つの神を指す。
- 11) 最後の晩餐：イエス・キリストが十字架につく前夜に、12人の弟子たちと食事をした出来事。
- 12) アンセム：英国国教会（日本聖公会）の聖歌で、聖歌隊のために作曲された奉唱曲。

参考文献

教皇フランシスコ/カトリック中央協議会訳『イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔—いつくしみの特別聖年公布の大勅書—』カトリック中央協議会、2015
新共同訳『新約聖書』日本聖書協会、2002